



# かどや通信

第10号

発行日：平成28年1月

発行行：かどや保存会

発行責任者：清水 久行／編集：廣野 克子

## 念願達成！ 会員数二百名に！

象的だったが、正月早々、しかも記念すべき三百人目の会員になってくれるとは！

新春早々縁起が

いい！記念品等は準備していなかったが、事務員のタマちゃんも当日勤務のボランティアさん達の熱々な拍手で歓迎の意を表した。

嬉しいことにトモ君はフェースブックにかどやの紹介をしてくれるぞうで、取材のため連休となった十日&十一日にも足を運んでくれた。十日は「新春かるた会」が催されていたが、取材のかたわらでかるた会にも違和感なく参加してくれる頼もしい新会員だ。

ところで、かどや保存会の会員は、開館当初の二十五年度は二百四十八名、翌二十六年度は二百七十五名だった。当初からなんとか三百名を達成したいと頑張っていたが、三年目にして大台の三百名となった。

この快挙は、清水会長のブルドーザー的熱血勧誘に負うところは大きいですが、イベントや展示の度に足を運んでくださる皆さまのご支援の

賜物に他ならない。

今後は四百名、いや五百名を目指し、スタッフ一同一丸となり皆さまに喜んでいただけるよう企画・運営に精進してまいります。引き続きご支援のほどよろしくお願いいたします。



今年も野村史隆さん製作の門松で新年を迎えたかどやの玄関

平成二十七年度のかどや保存会の会員数が一月九日、正会員と賛助会員併せて三百名を達成した。記念すべき三百人目は、なんと当会員としては最年少の二十四歳のさわやか青年だった。かどや保存会では毎月、理事が集まる「かどや会議」を開き、課題や行事企画の検討、入館者数、会員数の確認等を行っている。一月七日の会議では「あと一人で念願の三百人だが、二十七年度は三ヶ月を残すのみのため、達成は難しいのでは」と話していたところだった。

愛称をトモ君と勝手に名付けた



かの青年は、昨年十二月にかどやを訪れ、建物の説明に熱心に耳を傾けてくれたのが印

### 「速」

「速」すなわち「スピーディ」が、当紙編集員の今年の目標だ。

「もっと簡単でええから、タイムリに発行してくれませんか」と度々清水会長から指摘され、日々焦ってはいたが、実行はなかなか難しかった。

しかし、昨年九月以降の情報がたまりにたまって身動きとれず状態で新年を迎えてしまつて大反省。

今号は、とりあえず一月の最新報告とし、今後は情報が古くならないように「速」発行してゆく所存。本年もご愛読よろしくお願いいたします。(び)

## 《恒例のかるた会、白熱!》

かどやの事始めである「新春かるた会」が一月十日に開催された。かどやにとっては年始恒例の行事だが、今回は『広報とば』への掲載を忘れてしまい、「参加してくれる人はいるのだろうか」と年明け早々ハラハラドキドキの事始めとなった。しかし、かどや保存会会員に毎月配布しているイベント情報や口コミによって十二名が参加され、例年通りの正月風景が広がった。

三回目となる今回の参加者は、子供の頃に百人一首で遊んだ経験者がほとんどで、昔懐かしいかるた会を毎年楽しみにしてくれている人



達だ。数十年のブランクはあるものの、それぞれに得意の札があり、上の句が読まれると、すかさず「はい」の声と共に下の句の札が飛び交い、なかなかの白熱戦が四回にわたり繰り広げられた。また、読み手役の清水会長が時折、和歌や作者についての解説も加え、参加者から「百人一首がより楽しくなった」と好評を博した。

戦いの後は、かどや特製のぜんざいを食べながら、子供時代の正月の情景を話し合うなど、のどかな時間が流れた。別れ際には「来年もやりましょう」「次は絶対あの札は取るよってにな」等、再戦を約束してお開きとなった。

昭和中期頃までの正月といえば、家族や友達が集まり、お雑煮やおせち料理を食べ、食後は百人一首やいろはかるた、トランプをはじめ双六や福笑い等のゲームに興じたものだった。かどやでは、そんな古き良き時代の日本ならではのお正月を再現したいと考えており、今年は九月以降に月一回程度「百人一首の準備会」を開催する予定だ。経験者はもちろん、どんなものか試してみた

いとお考えの方も、実現の運びとなった暁には、是非ご参加を。

## 《あでやか彩りで見学者釘づけ》

### 「布遊び〜迎春 四ツ葉会」

一月の展示(一月四日〜三十一日)は、「布遊び〜迎春」と題した初春を祝うあでやかな彩りの作品展だ。黒地に赤や白の椿が春を告げる壁掛けやリース風のしめ縄、羽子板等々、お正月らしい作品約四十点が飾られている。

この展示が目的で来館されたお客様はもちろん、観光の一環で来られた方々も、「すてきやなあ!」「発想が素晴らしい!」等々、色彩とアイデアの素晴らしさにしばしば見とれて立ち止まっている。



これらは、昨年五月に「布遊び〜春夏秋冬」と題する作品を出展していただいた四ツ葉会(代



表・野村輝代さん(の作品)だ。同会は、伊勢市在住の手芸好きの女性が四人が四年前

に、古布等を利用して四季折々の風物を題材に作品を作ろうと結成された。空時間に集まり、題材を決めて思い思いの布を選んで作品作りを楽しんでいる。伊勢市では毎年、展示会を行っているが、鳥羽ではかどやで二度目の出展となった。

野村さんは「せっかく作っても、多くの方に見ていただける機会が少ないので、こういうチャンスをお願いしたいです」と話してくれた。

二月は「かどやのお雛さま」と題し、かどやに伝わる御殿雛等が飾られるが、四ツ葉会の作品も出展されるので、こちらも見逃しなく!

## 《新春告げる箏の音響く》

新年初の昼下がりにコンサートが一月二十四日に行われ、今年も伊勢正派松朋会小山社中の皆さんによる箏の華やかな音色が館内に響き渡った。

当日は数十年ぶりの寒波襲来で大雪の可能性ありと天気予報が報じていたため、前日のリハーサルにも立ち会った事務局は「素晴らしい演奏やけど、聴きに来てくれる人おるゆるか」とはらはら。普段なら開演三十分から人が集まり始めるが、二十分前によく四人が来館しただけ。事務局の不安はむくむく



と広がったが、開演五分前にはナント四十名を超える方々にお越しいただき、会場はすし詰め状態。大寒波を吹っ飛ばす大盛況となった。

今回は、箏と三弦(二味線)に加えて、尺八同好会の筒音会からも三名が賛助出演された。まず、お正月には欠かせない「春の海」のあてやかな演奏で始まり、ソロ、二重奏、三重奏、五重奏等に加えて、尺八の三重奏、箏と尺八の合奏など古曲から最近の歌謡曲まで、幅広いレパートリーが披露された。特に古曲「けしの花」は、箏三面、三弦二棹、尺八三本による華やかな演奏で、日本の古典芸能の素晴らしさが会場を圧倒した。

参加者からは「こういう演奏会は大きなホールで行われるので、なかなか行く機会がないけど、こんな身近な場所で大格的な演奏を聴けて、すごくよかった」等、賞賛の声が多く寄せられた。

## 「節分に向け鬼面作り」

### 「タケちゃん先生大奮闘」

第二十六回かどや塾「節分に向け、鬼面を作ろう！」が一月二十三



日に開催され、小学生から八十代まで十三人が鬼面作りに挑戦した。先生は、昨年8月にも折り紙教室で講師を務めてくれた折り紙の達人・タケちゃんこと山本剛幸さんだ。

鬼面は、かなり複雑な折り方のため、まず大きめの紙を使って練習した後、十センチ四方の色紙に貼る金銀二つの鬼面作りに取りかかった。

タケちゃんは、分かりやすいようにひと折り毎に図解した部分を準備し、丁寧な説明をしてくれたが、一朝一夕には呑み込めない。そこで二時間中立ちっぱなしで、一人ひとりの疑問に答えてくれた。「先生！ここ分からへん」と誰かが手をあげると、「先生やなくて、タケちゃんって呼んで」と笑いながら、それはそれは丁寧な指導。あつという間に、おばさまたちのアイドルになり、「次はお雛様の折り方おしえてほしいわ」等のリクエストもでた。しかし、タケちゃんは働き盛りの



会社員、予定の確保もなかなか難しいのが現状だ。実は当日も仕事が入ってしまったのだが、鬼面作りは昨年の九月から予約していたため、タケちゃんがその旨を会社に伝えると、なんと「地域貢献にもなるので、先約を優先してよし」と、上司の理解を得て実現の運びとなったのだ。事務局は、何人集まるか分からないイベントを優先していただくのは気がひけたが、会社の協力も得られたので、一人でも多く参加いただけるようPRにも気合いが入った。その結果、定員を上回る参加を得て、しかも全員が大満足の様子に、胸をなでおろした。

最後に、作品完成を祝いかどや特製のぜんざいがふるまわれ、お開きとなった。

タケちゃんには盛大な拍手と「ありがとう、楽しかったわ」という参加者の笑顔が贈られた。

## 季節にあわせたメニューが好評!

### かどや調理倶楽部

かどや調理倶楽部は、できるだけ旬の食材や季節行事にあわせたメニューを心がけている。

昨年十二月は、クリスマスにも使えるピザを、管理栄養士の資格を持つカズミちゃんに教えていただいた。

大手企業のバリバリウーマンだったカズミちゃん、帰省後は実家の家業を手伝いながら、学生時代の経験を活かし、お弁当販売や趣味のお菓子作り等で腕を磨いており、最近のヒットメニューがピザだったのだ。それでも教えるとなると、ピザの土台となる粉のベスト配合を追究し、一週間近く夕食はピザだったそうで、心なしか普段よりのふっくらした様子でかどやに現れた。



「ピザが自宅で焼けるなんて」と申込は定員を超え、当日は手製ピザへの期待感もふくらみ、まるでクリスマスパーティーのような楽しい雰囲気です。ピザ作りに挑戦した。



一月は、二月のバレンタインデーにそなえ、チョコフリアンという焼き菓子とチョコクレープを、かどやではお馴染みのミホちゃんが教えてくれた。

フリアンは卵白を使った焼き菓子だ。卵黄を無駄にしないため、サイドメニューはカスタードを核にしたチョコクレープが選ばれた。

焼き菓子もクレープも女性の大好物とあって今回も満員御礼。七十代から近所のお菓子好きの小学生まで十一人が参加した。

試食タイムには、「クレープがもちりりして、おいしい!」と笑顔がひろがるティタイムとなった。

## コラム: かどやのつづき 縁は異なるもの

かどやでは、見学に来られるお客様には、「スタッフの総力を挙げて」と言うところとちよつと大きさが、出来る限り建物の説明をさせていただいている。国の登録有形文化財としてはさほど大きな

建物ではないが、建物のそこそこに建設当時の当主の思い入れが込められており、見過ごしそうなちよつとした細工にも解説を加えることで生き生きと蘇ってくるからだ。また、お客様と会話すると仕事や趣味の話等で、思わぬ発見があり、色々な縁が生まれてくる。

二十七年かどや保存会の記念すべき三百人目の会員となったトモ君もその一人である。同会員としては最年少クラスの二十代だが、昨年十二月に閉館間際に来られたトモ君は吉民家に興味があるんです」と目をキラキラ輝かせながら熱心に説明を聞いてくれた。おもしろいですね!今日は時間がないけど、年が明けたらまたゆつくり来ます」とさわやかに去って行ったが、約束どおり早速一月九日に来られ、開口一番「又会します」と言ってくれたのだ。鳥羽出身のトモ君は、鳥羽の伝統文化にも興味を持つっており、フエースブックに様々な切り口で鳥羽や志摩等に関する情報を自らが製作した動画で紹介しているのだそうだ。かどやも紹介してくださるそうで、十日と十一日にはビデオカメラ持参で早速撮影してくれた。建物の説明をさせていただけたお陰で生まれた、ありがたい縁である。

昨年二度に亘ってかどや昼下がりにコンサートで篠笛の演奏をしていただいた高校教諭のアツシ先生も、ご案内での会話がきっかけだった。案内役は元教師のカヨちゃんが担当。教師同士で会話が弾み、趣味の領域に至ったところ、やおらリユックの中から篠笛を取り出し演奏が始まったのが、そもそもだった。いつどこに行っても演奏できるようにと、出かけるときは必ず篠笛を持ち歩くのだが、伴奏用のCDまで携帯されているのには驚いた。篠笛の優しい音色は、かどやにはぴったりで、コンサートの運びとなったのだ。

そんなこんなで、お客様との会話から思わぬ縁が生まれ、かどやの輪がすこしずつではあるが広がっていくのは実にありがたい。また、説明をしていると建築や歴史等々に造形の深い方も多く、教えられることも度々だ。

館内説明は、お客様との縁をつなぐ貴重な絆となつているが、現状はボランティアさんの数が少ないため、観光客が増える週末にはフル回転で、ヘトヘトになることも。会員の皆さんで手伝ってみようかしら!と思われる方、ぜひご一報を。お客様との触れあい、楽しいご縁を広げてみませんか。(ぴ)